
考え方よ。

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

考え方よ。

【Zコード】

Z2973Z

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

新薬開発のコンサルタントと軍用兵器の設計を専業とし、世界規模で展開する国営企業・『PFRS』^{パフリス}。そこから逃亡した蒼神槐^{あがみえんじゅ}は、PFRSが隠蔽するバイオハザードを告訴しようと試みるが、ヒットマンの強襲により失敗。彼は最後の手段として、調査会社のエージェントを伴つての敵地潜入を画策するが、依頼を受けてやって来たのは何故か……明らかに拳動不審な二人組の少女だった。

『神の設計図』^{バイタルズ}と呼称される遺物をめぐり繰り広げられる、政府と軍部とPFRSの三つ巴。その中で葛藤する青年・蒼神と、彼を

取り巻く不確定要素達の攻防…… + 「ああ～～、やつぱ美青年の尻
はええのう」 「ダメよッ、オマツコヒトさんが見てるー.」

ネットに消えた学説と護衛される青年（前書き）

世界中で大ヒットしたアニメ映画「攻殻機動隊」などの監督、押井さんが現在のアニメ作品について「オタクの消費財と化し表現の体をなしていない」と批判した。

ネットではこの発言に納得する人もいるのだが、自分達の好きなアニメを批判していると感じたアニメファンは「押井こそオワコン」などと押井さんに対する盛大な批判を展開している。

ほとんどのアニメはオタクの消費財と化した

朝日新聞は2011年11月21日付けの電子版コラム「アニメゲ井」で、押井さんの東京芸術大学大学院映像研究科での講演（1月12日開催）を紹介した。講演で押井さんは

「僕の見る限り現在のアニメのほとんどはオタクの消費財と化し、『ページのページ』の『表現』の体をなしていない」

と語ったという。つまり、制作者には新たな創造性や、作品を通じて訴える思想的なものが欠如し、過去にヒットした作品の焼き直しばかり。例えば「萌え」が流行すればそうした作品ばかりになっている。また、今のアニメはオタクと呼ばれるファン層に媚びたものが多々、こうしたことから「表現」が制作者から無くなつた、という批判だ。

確かに11年9月から始まつた20本近い新作テレビアニメを見ると、さえない男性主人公の周りに美少女が群がる「ハーレムアニメ」が驚くほど多く、過去にヒットした「ハーレムアニメ」作品と共に通する内容がかなり多い。

富崎駿監督も過去の作品の「コピー」に嘆いていた

実は、過去のヒット作品を真似たものが増えている」とについては、以前から警鐘が鳴らされていました。富崎駿監督はベルリン国際映画祭で「千と千尋の神隠し」^{グラントプリ}が金熊賞を獲得した02年2月19日、記者会見を開き、記者から日本アニメの世界的な地位を質問されると、「日本アニメはどん底の状態」とし

「庵野が自分たちは「コピー」世代の最初と言っていたが、それより若いのはコピーのコピーだ。やうしたこと（アニメ業界が）どれだけ歪んでいて薄くなっているか」

などと答えている。庵野といつのは大ヒットアニメ映画「新世纪エヴァンゲリオン」の庵野秀明監督のことだ。

今回の押井さんの発言についてネットでは

「萌えクソアニメの乱発は誰が見ても異常」
「アニメ業界が飽和しそぎで、コピー品を粗製乱造しなきゃ回らなくなってる」
「売らなきゃ食つていけないからな。安定して売れるのがオタク向けの萌えやH口」

などと納得する人もいるのだが、現在主流となっているアニメのファン達は、自分達の趣味趣向、好きなアニメを批判するのは許せない、と激しく反発。しかし理論で立ち向かえないからなのか

「押井のアニメくそつまんねーんだよ」
「押井も信者向けの消費財じやん」

などといった作品批判や、人格批判へと発展し、大混乱となつてゐる。

この記事は、『小説家になろう』における作品の傾向にも該当します。“異世界”・“主人公最強”・“転生”・“ハーレム”・“チート”……オリジナルも一次創作もこの手のタグであふれかえっています。

アニメもラノベも観てもらつてナンボ、読んでもらつてナンボ。それは事実です。が、作品のファーストフード化に回収屋は食傷気味です。ちょっと考えてみましよう アナタはより良い味を求めてハンバーガーや牛丼を食べに行きますか？ そう、まずあり得ません。ただ単純に安く手っ取り早く、口当たりの良い刺激が欲しい場合の効率的な手段として選択されているのです。まさに『消費財』です。食べたその瞬間は確かに一定の満足感が得られます。が、店を出た直後には味の記憶など脳から消えます。作品も同様：「どこかでよく目にするファクターに誘引され、その時は満足感が得られます。しかし、人から「で、どのシーンに一番感動した？」『ストーリーのあらすじを教えて』などと聞かれた際、どこまで答えられるでしょうか。正直、難しいでしょう。消費者は既に欲しきつた刺激を消化し終え、また次の新しい安定した刺激を求めているのです。そこには作品を楽しんだという“記録”はあっても“記憶”はありません。

一次創作で一本完結させている回収屋が述べるのもなんですが、自分の作品構築のためにプラスとなるオリジナルに触れてみたい！

…常日頃から思っています。

一次創作にしか興味がない読者様をガツツリと矯正させる意味でも、今回の作品を披露していきたいです。

ネットに消えた学説と護衛される青年

『惑星自壊説』 今世紀初頭、ネットのある科学サイトに発表された学説。仮説の域を出ない突拍子もない理論であつたため、当時は一部のカルト的な支持者しかいなかつた。38億年前、地球上に1個の隕石が落下。隕石に含まれていたアミノ酸を素に、原始生命が発生する。あらゆる気象条件下で化学反応を開拓し、次々と新しい生命が創り出されていった。彼等は最初、ごく単純な遺伝情報しか有しておらず、他の生命を食らつて取り込むことにより、複雑なDNAを構築し進化していった。地球という温床の中で、何億年もの間その行為は続き、新生しては滅びを繰り返す。それは自然の法則に完璧に則った現象であり、地球はただじつとその永久不滅のサイクルを見守っていた。そこで……地球は思った。

『死』とは何だ？

惑星は巨大な一個体の生命であり、いわゆる『意志』を持つとされる。が、その意志はあまりに不完全で、死に対する不安や恐れを理解できていなかつた。地球は自らの破壊力を行使し、5度も大絶滅を繰り返したが、どの手段も決定的なダメージを与えるには至らず、地球の意志は不完全なままだつた。しかし、彼には時間があつた。あり過ぎた。だから永い時を経て考えた。

ダレかに殺してもらえばいい

最後にとられた手段こそが『人類』だつた。現生人類は、およそ20万年前に一つの独立した種として出現した。殆どの生命体が自然環境のサークルに解け合えるのに対しても、人類だけが進化の過程

でサークルから外れていった。異常なスピードで脳髄を発達させ、爆発的に増殖し、生態系のピラミッドを決定づけ始めた。海洋を汚し、大気を濁らせ、大地を腐らせ、他種を滅ぼしだした。このことから引き出された一つの結論……

＜『人類』とは、地球が自らを滅ぼすために創り出した『生体兵器』である＞

この学説を発表した科学者は、マスクの前には一度も姿を見せず、ネット上のみでのゲリラ的活動を繰り返し、ひたすらこの学説の危険性を主張していた。このままでは近い将来、確實に地球の自壊は成功してしまう。地球は人類を作為的に進化させて、より優れた遺伝情報の所有者を生成している。20万年近くかけた計画が最終段階に入っている。名を明かさず、顔も見せず、ひたすらネットの中で声を上げるその科学者は、新興宗教の教祖の如き扱いを受けている。この小さな騒動が、一般メディアにも取り上げられるようになった時分の1ヶ月ほど前……日ノ本の本土から遠く離れたとある海域にて、局所的な海底火山が発生。それにより生じた巨大な海底の亀裂から、正体不明の遺物が発見された。それは『人型』。回収し検査した当時の国家調査室が出した回答……

＜全長170センチ・重量80キロ。材質は不明。人間の造形に酷似しており、体表面は透明で、内部構造が肉眼で認知できる。骨格・筋肉・臓器・神経・血管……その全てが人型容器の正しい位置に形成され、電子顕微鏡を使って初めて確認できるような、微細な組織まで設計された『完全な人体設計図』＞

最も奇異とすべきは、その人体設計図が出土した海底の地層の年代。測定した結果、その遺物は現生人類が生じるよりも以前のモノと断定された。この遺物は『神の設計図^{バイタルズ}』と名づけられ、国家調査

室は情報規制法案を立ち上げてハッキング防止対策を施し、回収にあたつたサルベージ班には情報機関の監視がつくほどだった。ネット上を騒がせた科学者が、この一件と何だかの関係があるのでは…そんな噂が囁かれた。しかし、国家調査室のハッキング対策により、問題の科学者も息を潜めだし、次第にその存在はネット社会の記憶から消えていった。そして

20年が経過した。

一人の青年が刑務所の中にいた。数名の私服刑事が周囲をウロウロしているが、特に張り詰めた感じの空気でもない。30坪程の広さがある一室で、その青年はソファに腰掛けて両手を組み、何かを心配するような面持ちでうつむいている。

「どうぞ楽にしてください。我々がついていますので」

刑事の中でも一際貴禄のある初老の男が声をかけてきた。そして、コーヒーの注がれた紙コップをその青年に差し出した。

「ええ……分かっています」

そう言って紙コップを受け取る青年の顔には、明らかに疲労の色が濃く出ていた。歳の頃は20代前半くらいだろうか、まだ少々幼さが残るその顔からは、何かに怯えるような落ち着きの無さが見て取れる。

「あの……ちょっとトイレに」

「ええ、どうぞ」

この部屋に出入り口は一つ。コーヒーを差し出した初老の刑事が、出入り口の側に立っている若手の刑事に目配せする。ドコへ行くにも護衛がつく。刑務所の中なのだから当然の処置なのだろうが、見知らぬ複数の人間に、四六時中まとわりつかれるのは力ナリのストレスになる。『インペリアム』と呼ばれるこの刑務所は、一般的の犯罪者収容施設とは異なり、犯罪に巻き込まれてしまった被害者や、大物犯罪者を摘発するのに重要な役割を果たす証人を保護するため

の隠れ家。國家調査室の直轄で、軍施設並みにセキュリティレベルが高い。

「ボクの証言で本当に解決するんでしょうか……？」

部屋に戻った青年がボソッと呟いた。

「もちろんです。我々に全て御任せください」

何とも冷静に言つてくれるが、言つのは簡単。問題は結果だ。

「明日の段取りは？」

「法廷には朝9時到着予定ですの、7時半にはここを出ます。やるそり休れますか？」

「……………そうさせてもらいます」

と呟つても、寝室が別に用意されているワケではなく、ソファに横になるだけ。そんな生活が既に5日も続いている。

「それではまた明日」

初老の刑事は、出入り口にずっと立っていた若手の刑事に一通りの指示を出し、他の刑事達と共に部屋を後にした。

「……………」

窓一つ無いこの収容施設に閉じこもつていると、昼と夜を区別する感覚が日増しにおかしくなつてくる。テレビや新聞に目を通して一日の経過を知るが、外出できないままだと、まるで世界から追い出されたような違和感が生まれる。

「もう少しの辛抱ですよ、蒼神博士」あがみ

青年の心境を読み取ったのか、見張りとして残った若手刑事が、照明の一部を落しながら声をかけてきた。

「……………宜しくお願ひします」

『蒼神博士』と呼ばれた青年は、ペコリと小さく頭を下げ、毛布をかぶつて横になつた。

「……………」

静かだ。あまりに静かだ。雑音が一つも聞こえないと、逆にその静寂が耳障りになるくらいだ。

(よそう……今更考えても遅い)

視界が暗くなる。目を閉じる。眠気が.....

フォンフォンフォンフォン！－ フォンフォンフォンフォン！－

「 !?」

一匹目の羊が柵を越えようとした瞬間、けたたましい警報が鳴り響いた。見張りの刑事はホルスターに手をかけ、青年はソファから飛び起きた。

「な、何が……！？」

「……分かりません」

バタバタバタバタッ！

出入り口の向こう側から複数の足音が。刑事がホルスターから自動拳銃トマチックを抜く。

「博士ッ！」

扉のコンソールが点滅してロックが解除され、さつき出て行ったばかりの刑事達が慌てて雪崩れ込んできた。

「主任、何事ですか！？」

「敷地内に不審者の侵入を確認した。相手は一人だけだ」

「敵襲ですか！？」

「分からんが……もしそうならとんだマヌケだ」

「刑事さん、ここにいて大丈夫なんですか？」

青年が怯えきつた声で問い合わせる。

「大丈夫もなにも、インペリアムにおいてこの部屋が最もセキュリティに優れているんですよ。心配ありません」

そう言つて他の刑事達に指示を出し、素早く配置につかせる。

「テレビをつける。監視カメラとチャンネルを合わせるんだ」

若手刑事がモニターを調整すると、監視カメラの映像が映し出される。正面玄関口、事務室、医務室、屋上、中庭.....発見。
「何がありや？」

中庭をモニターしているカメラの映像に、不審人物が映っている。

ライトアップ用の照明が強すぎて顔はよく見えないが、どうやら女
のようだ。体にピッタリと張り付くようなボディースーツを装着し、
そのうえ裸足。不審尋問を受けても文句の言えないような格好だ。
どうやって中庭まで侵入したかは不明だが、モニターの女は何かを
探すかのようにキヨロキヨロしている。

「こちらセクション・ヒ、モニター室応答しろ」

刑事主任が無線機で呼びかけた。

「こちらモニター室。そつちは異常無いか？」

「今の所はな」

「機動部隊が全員配置についた。コスプレまがいのイカレ女の方は、
まだこちらの動きに気付いていないようだがな」

「結構。絶対に殺すなよ。貴重な情報源になるかもしけん」

主任が北叟笑む。その後

「蒼神博士えええええ
おおおおお
！　ドロドロのおおお

豪胆なのがバカなのか、女はターゲットの名を大声で喚く有様だ。
その声は監視カメラのスピーカーを通して、青年のいる部屋にもハ
ツキリと聞こえてきた。

「そんな……何てことを！」

名を呼ばれた本人が、口を半開きにしてたじろいだ。

「知っている顔ですか、博士？」

「い、いえ……そんなハズは……」

ピピッ、ピピッ、ピピッ

刑事主任の無線機が鳴る。

「準備万端か？」

「いいでもいける」

主任は無線機を片手にモニターを凝視して……

「よし、制圧開始ツ――！」

ゴー・サインが出される。同時に警棒やライフル銃を持つた機動隊員十数名が、建物の窓や物陰から躍り出て、侵入者の周囲を取り囲んだ。

「そこを動くなッ！」

早く腹這いになれッ！

「武器は持っていないかッ！？」

スピーカーから機動隊員の喧騒が聞こえてきて、目標の女不審者

があつという間に制圧されたかのよつに思えた。

.....」

瞬きを忘れ、真剣な目でモニターの様子を見つめる蒼神博士が、ゴクリと息を呑む。

くうわッ、びっくりしたあああああ～～！ アンタ達ダレよッ！？>
女不審者が自分の置かれている立場を無視し、無責任なセリフを
叫ぶ。

正月放課後の活動会の現行会計

機動隊員の怒号がとぶ。

「蒼神博士えええええ～～～！？聞こえないのぉおおおお～～～！？」
機動隊員の指示に一切従うことなく、またもや大声で青年の名前
を呼ぶ始末だ。

「何だコイツは……？」

あまりのマヌケな状況に、モーターを見つめる刑事達も呆れ返っている。

いいかげんにしろッ！

業を煮やした隊員の一人が女を捻り伏せようと、その肩をつかもうとした瞬間……

ブワツ

! !

隊員のでかい団体が宙に浮いて、背中から勢い良く地面に落下す

る。

「触らないでよ、バカ！！」

隊員の胸ぐらを片手でつかんで無造作に投げたのだ。女性の腕力とはとても思えない。

「抵抗するなッ！」

警告すると同時に、警棒を構えた隊員一名が左右から挟みこむようにして襲いかかるが、女はその場から一步も動かず、上半身を器用にひねって一本の警棒をかわすと、両の拳を裏拳気味に相手の顔面へと叩き込んだ。

「おいおいッ……！？」

拳を喰らった二名は鼻血を吹いて崩れ落ち、モニターで観戦する刑事達に不愉快な緊張感がはしる。

「大人しくしろッ！　いいか、これは最後通牒だッ！」

今にも発砲したくてウズウズしている銃口が女不審者に向けられ、スコープサイトのレーザーが目標の急所を集中的に這っている。
「つるさいなあッ！　早く蒼神博士を殺して帰ないと怒られるのツ！　だからオジサン達邪魔しないで　＞

バンツツツ
！！

発砲。

「……やつたか？」

モニターを見つめる刑事主任が画面にググッと近づいて目をこらす。

「ん……？」

様子がおかしい。

「何だ？」

女の上半身が大きく後ろに仰け反つて、曲がった釘のように固まっている。

「どうした？　命中したのか？」

刑事主任が無線で問う。

「分からん……少し待つてくれ」

ライフルをしつかりと構えた隊員数名が、合図を受けて駆け足で女に近づき、十分に警戒しつつ様子をうかがつ。

「どうなんだ？」

「あへへ……こりやヒビテえ。貫通してないとこらを見ると、一応、防弾処理のされたボディースーツのようだが、胸元がえぐれちまつてやがる」

「死んでいるのか？」

「この体勢で生きてたらコントだ」

「よし、検死官に委ねて身元を調べろ。わずかでも法廷で使える情報があれば」

「

ヒュッ

「う……ッ……！」

女の変死体が突如、上半身を360度ひねって元の体勢に戻った。と同時に、無線機から呻き声のようなものが聞こえ、取り囮んでいた隊員達がもがくように倒れ伏した。

「な、何事だッ！？」

動搖する刑事主任が見たのは、女の両手にしつかりと握られた『刃物』。刃渡り30センチほどのシースナイフが一本……照明に照らし出されてギラギラと光っている。

「ひッ！」

明確な殺傷能力を目にした蒼神博士が、顔を引きつらせた。

「痛いなあッ！ 危ないじやんッ！」

ライフル弾の直撃を受けて素直に感想を述べている時点での尋常な相手ではない。

パンツ！ パンツ！ パンツ！

残る隊員達は指示を待つこともなく本能に従つて拳銃で応戦する。

「ここにやろ！…」

女性はそれに応えるかのようにナイフを構え、機動隊めがけて跳びこんでいく。

「なッ！？」

思いもよらない展開に、モニターを凝視する全員がマヌケ面で口を半開きにしている。

「主任……我々はどうします？」

「何もするな」

「……は？」

「篠城だ。ここにやり過します」

「し、しかし……」

スピーカーからは、あまり聞きたくない隊員達の断末魔が聞こえてくる。

「我々の仕事は、あくまで蒼神博士を無事に法廷へ送り届けること。避けられるリスクは極力避けろ」

モニターの隅の方で血飛沫が上がっている。銃声は鳴り響いているが、隊員達の叫び声は止まらない。

「応援は！？　ここは刑務所でしょ！？」

蒼神博士が必死の形相で最もな質問をする。

「残念ながら……このインペリアムは囚人を収容する一般のソレとは違い、最小限の刑務官で維持されています」

「つまり……外部からの応援が到着するまで、身動きできないということですか？」

「申し上げにくいのですが、その選択肢もありません

「な、何故です？」

「重要な証人を確実に保護するためには、情報の漏洩を極力避けなければなりません。そのため、外部との連絡手段はモニター室の端末からしかできません」

「でしたらすぐ、モニター室の担当者に連絡をツ

「担当者は……現在、モニターの中で死んでいます」

「画面を指差され、絶望感が一挙に湧いてきた。

「そんな、バカな……！」

蒼神の顔色がみるみる青ざめて、イヤな汗が額をじつとりと濡ら

している。

「この状況下で言つのもなんですが……どうか落ち着いてください。ここは絶対に安全です」

刑事主任は部下達の手前もあつてか、冷静を装つてはいるが、篠城というのは想定外だった。が、彼は仕事の関係上、この部屋について熟知していた。

「この部屋の外壁には、原子力発電所で使用される防護壁と同じ物が用いられています。たとえ大型航空機が時速100キロで突っ込んできても、防ぎきるだけの強度を誇ります。つまり、侵入者がライフル銃を奪つて撃ち込んできたとしても、微動だにしません」

彼の講釈を聞いて部下の刑事達に安堵がもどる。

「それはそうと……博士、心当たりはないんですか？」

「あ、う……」

ターゲットの名前を力一杯叫んで登場するような危険人物……そんなヤツと知り合いとは言いたくないだろうが、状況からある程度の予想はついていた。

「どうなんですか？」

「お、おそらく、アノの女性は……」

ガギヤン

「ツ！？」

聞きたくもない剣呑な音がして、部屋の中の全員が一点を見つめた。つい先程説明のあつた、特別な防護壁から何かが“生えている”。そして……

ツツツ！！

ガリガリガリガリツツツツ
ツツ
！！ ガリガリガリガリツ

「うおッ！？」

絶対安全なハズの防護壁に、ものすごい勢いで割れ目が入つていい、汚い四角形を作っていく。コンクリートの破片のような細かい瓦礫を床にタップリと散らかし……

ドオオオオオオ
ドオオオオオオ
ン！！ ドオオオオオオ
ン！！

「うおおッ！？」

土木用重機が衝突していくような轟音が響き渡り、部屋中がビリビリッと振動する。

「あ、ありえん……！ 一体、何でできている……！？」

まさかの超力技。防護壁の性能を凌駕するナイフの切れ味と、女の膂力。目の前で起きている現実に対処すべく、刑事主任はホルスターから拳銃を抜く。他の刑事もそれにならつて銃を構えたが、このまま女不審者が突入してくれば、モニターの中の斬殺体に仲間入りすることは目に見えていた。

「博士、出入り口まで下がってください」

「え……？」

「見る限り、敵は単独犯です。別セクションに逃げ込めば、多少の時間稼ぎにはなるでしょう」

「で、でも……アナタ達は？」

「このような体たらくで申し訳ありません。我々はここに残つて出来る限りの

「うつりやあああああああああああああああ

ツツツ！－

ドゴオオオオオオオオオオオオ
ツツツン！－

とてつもなく力のこもった一声と同時に、防護壁の一部が積み木のように内側へ抜き出される。立ち上る粉塵……その中を人影が一瞬揺らめく。最早、主任の指示を仰ぐ必要はない。

パンパンパンツ！　パンパンパンツ！

9ミリ弾が粉塵めがけて次々と撃ち込まれ、弾が命中する度に人影がゴム人形のように弾む。

「博士ツ！　さあ、早くツ！」

扉のロックが外れる。

「ご、ごめんなさい……ボクは……」

「アレツ？　蒼神博士の声がした

（　ツ！？）

少女のような幼さの感じる声がして、『敵』はその威容をさらけた。年の頃は20代半ば程で、浅黒い肌をしており、染めてあるのか地毛なのは不明な白髪のミディアムカット。

「あ、博士がいた。じゃあ、すぐに殺しちゃうね」

本人を前にして、屈託の無い笑顔でサラリと宣言する。彼女の表情には何の意図も感じられない。外部から受けた刺激に即反応する昆虫のようだ。

「フ、フリー・ジア……どうして君が、こんな……？」

面と向かって“今から殺します”と宣言する女を前にし、彼の脚は笑っていた。

「畜生がツ！」

パンツ！

彼等と不審者との距離はわずか。刑事主任の撃つた弾が外れるハ

ズもなく、『フリージア』と呼ばれた女の喉を貫通した。

「げほッ！
げほッ！」

首に紅く小さな華が咲き、女は激しく咳き込んで辺りに血をブチ撒ける。

やつた

首に銃弾の直撃を食らつて倒れないのなら、相手は間違いなく人とはみなされない。そして、彼等警察にそんな“人外”的な相手など務まりようもない。

まるで小児科の待合室で痛がる子供だ。もちろん、倒れる様子は

「アーティストのアーティスト」

主任、
激昂。

ノミツ

光刃

「パパがね、博士を殺せって
ミナツミナツ、ミナツ

總殺。

卷六

「そ、そんな……『支配人』がボクを？」
「うう、殺しておなかつて。どちら勝手

ればいいの？

幾つもの斬殺体を積み上げておきながら、根本的な質問をされた。博士の表情が恐怖とはまた別の感情で曇る。それは相手に対する哀れみのようにも見てとれた。

「フリー・ジア……君の足元に倒れ、血を流して動かなくなつた人達がいるだろ？」

ପ୍ରକାଶକ

「これが人を“殺す”ということなんだ！」

彼はとつても大切な事を教えていた。女は自分の足元に転がる刑事の死骸を、足のつま先で突つつく。もちろん、反応は無い。初めて目にする生き物を観察するよつた女の目つき……その瞳は瞬く間に潤む。

「は、博士え、博士え……動かないよお！ 何にも言わないよお！」
女が泣き始める。刑事達の死を完全に無駄にする涙がボロボロ流れ出る。

「そう、これが“死”だ。フリージア……君がしたことだ」
彼は泣き出す女に対して、とじめをさすかのように毅然と言い放つた。

「うつ……うつ……うわあああああああああああああああん……！」
号泣。

「博士が死ぬのやだああああ～～～！ 殺すのやだああああ～～～！」

とうといの場にしゃがみこんで泣きじゃくる始末だ。

「フリージア、こっちを見て」

そう言って博士はその場にゅうくつと体を沈め、何の脈絡もなく倒れこんで動かなくなつた。

「…………博士？」

唐突な出来事に泣くのをやめた女は、鼻水をすりながら彼に呼びかけた。

「…………」

が、応答は無い。

「し、死んじやつた……博士が死んじやつた……！」

女の顔色がみるみる青ざめる。冷静に状況を把握できていない彼女にとって、目の前で起きた現象は、あまりに残酷な仕打ちにも見て取れた。

「…………」

本物の死体に混じつて、偽物の死体を演じることとなつた蒼神は、ただじつと息を潜めて成り行きに身を委ねるしかなかつた。

「ひぐつ 博士が、ひぐつ 死んじやつた。フリー ジアが殺しちやつた（泣）」

ペタペタペタ……

裸足で歩く悲しげな足音を残し、彼女はついさつき自分が突貫させた壁の穴から出て行つた。

「…………」

嵐が 去つた。が、青年はまだ動けそうにない。
(どういうつもりだ？ 彼女を外に出すなんて……)

大勢の人間が死んだ。自分が成そうとしたことに協力した人達が犠牲になつてしまつた。既に危機は去つていたが、彼の肉体はあまりに軽く失われる人命の現実に蝕まれ、しばらくは動けそうになかつた。そして……

1週間後

一人の青年……『蒼神槐』あがみえんじゅは自宅マンションのリビングで悩んでいた。刑務所で起きてしまつた大惨事をきっかけに、蒼神博士は法廷での証言を拒否。それより以後、彼の周囲は静かになつた。直接的な警護をする者はおらず、一日に数回、パトカーがマンションの周囲を巡回するくらいだ。

(ボクのしようとした事は、間違つていたのか？)

彼はPCのモニターを見つめながら自問した。法廷に立つと決めたのは、己の正義に迷いがなかつたから。では何故、今の自分は証言を拒否し、自宅に引きこもつてゐるのか？ 全てが無駄になつてしまつた。なんとも単純な計算だ。

“個人が組織に勝てる道理は無い”

ただ……ただ一つだけ考えがあつた。公の場で社会的な楔が撃ち込めないのなら、非公式の場で攻撃する。つまり、原告本人が直接調査に乗り出すのだ。ただし、単身乗り込んだりすれば、自滅することとは目に見えている。先日のような事例がある以上は『護衛』が必要。そこでどうする？

(そろそろか……)

彼は時計を見て、胸に秘めた微かな期待を膨らませていた。『イレギュラー』ネットで発見した調査会社のサイトだ。TOP項目には二つ説明されていた。

〈個人を対象とした総合調査会社。警察OB・元軍人・情報機関出身者等で組織され、企業やそれに付属する団体、宗教組織、暴力団等からの警護、または直接的及び間接的な調査を目的とした、自治体公認の企業〉

……とある。一般的のメディアでは聞いたこともない社名だつたが、自分がこれから相手にしようとしている連中の事を考慮するなら、備えは必要。

ピンポーン

来た。

この瞬間から彼の反撃が開始される。昨晩、腕利きのエージェント一名をよこすとメールがあつた。なんとも心強い。どんな屈強な男達が来てくれたのか。

ガチャ！

「…………」

ミーンミンミンミーン！

街路樹でセミが鳴いている。ドアの向こうに看護婦と医者が立つ

ていた。

「…………」

ミーンッシー ミーンッシー

状況が上手く説明できないが、田の前に白衣の天使と女医が立っている。

「…………」

ミンミニンシー ミーンッシー

三人はいつまでも見つめ合っていて、何もしゃべらない。

「…………」

バタンシ！

蒼神博士は仕方ないんで玄関戸を開めた。力強く閉めた。

ドンドンドンシ！ ドンドンドンシ！

「すみません！『イレギュラー』から派遣されたモンでーす！」

「ウソじゃないですよー！ 社員証もありますから開けてください！」

ドアを叩きながらそう言つてるもん、彼はもう一度開ける。

「…………」

無言。

無言。

看護婦の方がラジカセを持つてゐる。再生ボタンを押した。流れてきたBGMは『ラジオ体操第一』。

バタンシ！

閉めた。

「わーっ！ 待つて、マジで待つて！ こつから真面目だから！ ホントに真面目だから！」

ドンシ！ ドンシ！ ドンシ！

このまま放つておくと玄関戸の前でいつまでも叫んで、御近所から身に覚えの無いウワサが出そうなんで。

ガチャ

「とつとと入ってください
彼の戦いが始まった。

ナースと女医

速報です。昨今懸念されていた政府直轄の国営企業、通称『PFRS』^{パフリス}で発生したとされるバイオハザードについて、PFRS側は「事故が起きたという事実は無い。職員による誤報である」と、変わらず事故を否定。政府は来週にもPFRSの幹部立ち会いのもと、公式調査を実施すると発表。今回の調査では……

テレビが毎日ニュースを放送している。蒼神博士はリビングのソファに来客者一名を座らせると、冷茶を一杯出してやった。

「あの～……一つ聞いていいですか？」

「はい、どうぞ」

「その格好は何ですか？」

ものすごく切実な質問をしてみた。

「看護婦です」

「女医です」

呼称についてはどうでもいい。

「……どうしてそんな格好を？」

「趣味です」

「右に同じ」

ダメだコイツ等。

「これ、社員証です」

そう言って偽ナースが、顔写真付きのカードを一枚取り出して見せた。

「イレギュラー調査課エージェント・『汐華咲』さん？」

「はい、今年で18歳になりましたッ！つまり、ポルノ解禁ッ！」
ポルノ解禁はどうでもいいが、未成年がこんな仕事してていいのか？

「いらっしゃーぞ」

女医も社員証を手渡した。

「イレギュラー調査課エージェント・『柏木茜』さん?」

「はい、咲チャンとコンビを組んでる19歳ッ！　『スチュームは手作りですッ！』

そう言つて一ヶコリ微笑んでいる始末。

「えへへ……すみません、ちょっと確認しておきたいんですけど……」

「…………」「何事か？」
「…………」「…………」

「それは見えないと？」

「ええ、まあ……」

ニイハノロコトニシテ

「そ、それって詐欺じゃないですかッ！」

「あたし等も、でも仕事が欲しくて！」

ルが届きましたよ。これはチャンスとばかりに……あははははは
はつ」

決して笑い事ではない。

「待つてください！」

おふツ！？ 待て、かこい

席を外せりつゝある博士めがけて、看護婦ヒ女医がタツクルして

きた。

「嘘ついた事は謝ります！ あたし達はただ、デスクワークとサヨナラして外に出たかつただけなんです！ この支配からの卒業なんです！」

言つてゐるコトは全く理解できないが、どうも面倒な話になつてしまふ

「あ」かくて
御二人は新人?

「いえ、入社して2年近くになります。けど、調査の仕事はこれが

初めてです

「……はい？」

「エージェントのライセンスは持つてるんですが、補欠なんですか

「そーなんです。ギリギリなんですね」

「えらいコトになってきた。しかし、今ここで追い返そうとすれば、

「大声出して人を呼びます」と言わんばかりのツラなんで、黙認するしかない。

「そ、それでは改めまして……蒼神槐です。宜しく御願いします」

彼はそう言つてテーブルの上に書類の束を広げた。一番上には証明写真の貼られた博士自身の履歴書が。

「なんとッ、このツラで23歳！？ てつきりあたし等とタメぐらいかと！」

「身長は？ 体重は？ 血液型は？」

「ワイワイ、ガヤガヤ……

一人は履歴書の写真を指差し笑つて、肘ついて。文句言つて寝転がつて、屁えこいたりで相談中。

(……これでいいんだろうか?)

宣しくない汗が博士の顔面より吹き出す。なんだかもうヤケクソまで秒読みだ。

5分後

「んッ！ よし、決定！」
「な、何がですか……？」
「本日より『童顔』——と呼びます
ニックネームが出来た。
「い、いや……そんなことよりですね、ええっと……そうだ、テレビを」

仕事の話が微塵も進みそうにならないんで、彼はPCをテレビにつな

『さあ、モニターを見るよう促した。

「職歴に記されてある通り、ボクは『PFRS』本部の元職員です。PFRSで現在起きているバイオハザードについては、御存知ですかね？」

「知らんッ！　あたしは基本的に深夜アニメしか観ないッ！」

ナースがやたら偉そうに胸を張つて返答する。

「コレって確かに……海の上にある如何わしい施設で、マスコミにボコボコにされる秘密組織だよ」

微妙にズレてはいるが、女医の方はまだ常識があった。

「ボクは1週間前、PFRSに対して法廷で証言するハズでした。あそこで一体、何が起きているのか、一部始終を世間に公表するつもりだった……しかし、挫折しました」

「さあてえ、な〜〜にがあるかなあ？」

ガチャ

クライアントが真剣に話し始めた途端、ナースはキッチンめがけて這い出して、冷蔵庫のドアを勝手に開けたりして。

「ボクは一介の科学者に過ぎません。軍部とも繋がりのあるPFRSと本気で渡り合つには、武力も必要であると悟りました。だから、御一人には護衛としてPFRS本部まで一緒に来て欲しいんです」

モニターに映る海上の巨大建造物……テロップには『PFRS本部施設』の文字が。蒼神博士は真剣な表情でモニターをビシッと指差した。

「おおッ、肉だ！　しかも国産牛肉だ！　あたしの勝利だあああああああッ！」

何に勝ったかは知らんが、冷蔵庫に上半身を突っ込んでナースが喚いている。

「ええっとですねエ、まずはコレに数字を書いて欲しいワケでして、はい」

そう言って女医が紙切れを一枚取り出し、博士の前に差し出した。紙切れには『給与明細書』と書いてあった。手書きで。

「……ギャラですか？」

「いかにも」

「いや、でも……成功報酬は調査が完了し、必要経費が明確になつてから請求書が送られてくるとサイトに……」

「えへへっと、うちの上司はこの件もちろん知らないワケで、バレると解雇。で、博士と仲良く契約。現金直接プリーズ」

要するに詐欺だ。

「不勉強で申し訳ないんですが、一いつこう調査一連の相場つて、幾らほど……？」

「相場？ んんッ？ ねえーッ、咲チャーンー！」

トントントン、グツグツ、ジュワアアア……

キッチンの方から手際の良い音が聞こえてくる。

「何じやいー？」

「わたし達の仕事つて、幾らぐらもらえるのかなア？」

「こりや！ 子供がお金の話なんてするもんじゃありませんッ！」

それよりこっち来て手伝いなさいッ！ 今日のランチはステーキだぞッ！」

今からでも遅くない、通報しよー。博士は心底そう思った。

く今回派遣される調査班には、情報機関の関係者が含まれているとの報道もあり、極秘裏に開発された、BC兵器による事故の可能性も視野に入れているのでは、との声もあります。PFRSのオーナー・『魅月紫苑』みづきしづかん 氏が昨日行いました、記者会見の模様をご覧ください

攻撃的で鋭い目つきをした、顔色の悪い男性がモニターに現れる。50代前半くらいだろうか、徹夜明けの営業マンみたいにスーツをヨレヨレにしている。

く皆さん御存知の通り、PFRSの本分は新薬開発のコンサルタン

トと軍用兵器の設計であります。マスクの間で流布されている正体不明のウイルス漏洩や、軍部の陰謀説などは事実無根です。PFRSは創立から20年程の若い企業のため、社会的に至らない箇所もあるかもしませんが、国民の皆様に貢献できるよう、日々努力しております>

<先日の元職員による告訴撤回に関しては、どう御考えですか？>
<企業が大きくなれば、必然的に賛同者と反対者の区別が生まれます。己の無知蒙昧を棚に上げて、企業を批判する輩はいつの世にも後を絶ちません。今回はその愚かな輩が、ギリギリで自分の過ちに気付いたという次第です。もちろん、法廷に立った場合、我々は徹底抗戦する準備ができます。正しい者は決して逃げ隠れしない>
記者達の質問に対し発言する中年男性は、自信に満ちている。

「この男がPFRS本部における元上司です」

博士は溜め息まじりに呟いた。

「フムフム。つまり、この不健康そうなオヤジが敵のボスか。モグモグ」

テーブルにはステーキ定食が一人前。家主の同意は無視。
「『敵』って……ボクはただ、PFRSの隠蔽体質を糾したいだけです。直接的な交戦なんて考えてません」

というより、この一人に一流SPのような働きを期待しても仕方ない。PFRSのバックには軍部がいる。物理的交戦となれば、特殊部隊の一個大隊くらいは必要になるだろう。

<今回の告訴内容についてお聞きしても？>

記者の一人が核心に迫る質問をした。

<告訴の内容については彼女に詳細を説明してもらいます>
カメラが移動して、魅月氏の隣に座る白衣姿の女性を撮る。

ブウウウウウウウウウウ

ツツツー！

冷茶を飲んでいた博士が盛大に吹いた。噴射の反動で仰け反った。

虹が出来た。

「こりやあああああッ！ 食事中に行儀の悪い子だねえ！」
ナースがプリプリ怒つてゐる。

「告訴の件に關しましては、原告側との和解が成立しております。
本件は軍内部の情報が扱われているため明言は避けますが、今後は
軍部の広報より隨時皆様に御報告があると思われます」

房状の後れ髪が特徴的な黒髪のポニー・テールで、フォックスタイル
の赤縁眼鏡をかけている。テロップには『PFRS上級職員・3
4歳』と出ており、名前は何故か伏せられていた。

「軍部の機密事項に該当するということですか？」

「そうです」

「責任者はどなたですか？」

「私からは御答えできません」

名無しの美女は記者の質問を突っぱねる。蒼神博士はやりきれない表情で、テレビの電源をオフにした。

「ボクのIDは当然もう使えません。つまり、PFRS本部に潜入するワケですから、政府施設への不法アクセスの罪で逮捕されます。それを踏まえた上で判断していただきます……同行できますか？」
正直なところ、この二人には来て欲しくない。手違いとはいえ、こんな未成年の女の子に犯罪の共謀者という履歴を加えたくない。
だから、博士はトドメに言及した。

「1週間前、ボクはPFRSが送り込んできたヒットマンに襲撃されました。武装した刑事達がたくさん殺されました。ボクはこうして運良く難を逃ましたが、次も上手く回避できるという保障はありません……それでも一緒に来てもらえますか？」

誇張しているつもりはない。事實をありのまま真剣に述べた。

「えッ……人が死んでんの？ ええっと、それはちょっと……ねえ？」

「アハッ、ハハッ……補欠の初仕事にしてはハードかも（汗）」

二人は微妙に気まずい空氣を漂わせ、目を見合させている。

「どうされますか？」

彼は矢継ぎ早に追い立てる。

「え？ あ、ああ……ちょっと」と「めんなさい。事務所に戻つて上司と相談してみます」

「そ、そうだよね……契約書類も持つてきてないし……アハツ、アハハ（汗）」

両エージェントは引きつった笑顔で立ち上がり、玄関の方へと後退していく。

「あの～～～上司に経過報告を入れなきやならないんですけど、明日はどうちらに？」

半開きにした玄関戸から、顔だけ出してナースが問い合わせた。「東部ベイエリアの港に行きます。ソコから密船に乗りこみます。周囲に一般人が多ければ、先方もあからさまな行動には出られないでしょうし」

「そうですか……じゃあ、また！」
バタンッ！

帰つた。

「さて……と」

博士はもう一度テレビの電源を入れ、モニターを見つめた。記者会見のニュースはまだ続いているが、オーナー・魅月氏と白衣の女性の姿は無く、広報の人間がつまらない言い訳で凌いでいる。

「結局、ボクだけか……」

孤独な戦いへと前進する決意をかためた。

シスターと神父

翌日

ブオオオオオオオオオオオオオオ～～

のんびりとした汽笛が聞こえる。潮風に乗った海鳥が太陽の下で輪を描き、青空の中を優雅に泳いでいる。正午……初夏の堂々とした陽射しを受け、港では出航を控えた巨大な船が泊まっていた。『サテュロス』と呼ばれる巨大豪華客船で、メインデッキの温水プールでは、Tシャツ・短パン姿の蒼神博士がパラソルの陰に隠れ、デッキチェアに腰を下ろしてラップトップを立ち上げていた。

『神の設計図』における検査結果

ディレクトリーの一つをクリックする。

記述者不明……神の設計図より抽出されたタンパク質は、数十のアミノ酸配列により一次構造を形成しており、二次構造は、他の動植物に見られる筒状構造とも板状構造とも似ておらず、三次構造において、ある程度のパターンが見受けられるが、未だに類型化には至らず、構造と機能の相関はハツキリしていない

記述者不明……神の設計図より抽出されたタンパク質を使用して、臨床実験を行う。何度かの実験により、以下の特質を発見。1・動物実験は全て失敗したが、人体実験はわずかながら成果を収めた。
2・生存する被験者は、皆同様にその肉体機能を画期的に向上させた。特に免疫機能は秀逸。物理的ダメージ・高熱・寒冷・細菌・ウイルス・毒物等に対する抵抗力は、常人の数倍。3・このタンパク質を培養することにより、新しい生命を確認。原始生命に酷似した

成長パターンを経て、多細胞生物に変化>

<記述者不明……神の設計図を管理する海底エリアの監視モニター
が、異常を確認。特定の上級職員との接触の際、原因不明の振動現象が発生。電気的な反射と思われる>
バイタルズ

<記述者不明……軍部より極秘のアクセス有り。神の設計図を軍のP4施設にて預かりたいとの依頼。私は反対した。一部の組織が秘密裏に所有して良い物ではないと判断。協議の末、極地に研究施設を整え、隔離するという決議案が採用される。これは軍上層部から紹介された将校からの提案で、建設費用の全額負担を申し出たらしい>

「コレのせいでボクは職を失つた……」

彼は短い黒髪をガシガシとかき上げて目を細めた。これから自分が成そうとしている事を、常に心の中で自問し続けなければ落ち着かない。そんな時間がやたらと増えた。

(ボクは殺されかけた……そう、殺されかけたんだ。また表に出ようとするば、軍が本気で動くかもしれない……拉致？ 殺害？)
ハアアアアアアアアア……

とても重くて長い溜め息が流れた。

(一個人が大組織に勝てるのか？……可能か？)

バタンッ

PCを閉じた。面前に広がる自分とは無関係な光景に溶けてしまったかつた。

水着のセレブがはしゃいでいる。

プールサイドを無垢な子供達が走り回る。

日光浴に、彩色豊かなソフトドリンク。

デッキブラシでせつせと掃除するスターと神父。

水平線の向こうには……

「て、アンタ等何やつてんですかッ！？」

鼻息を荒げる蒼神博士が一人の前に仁王立ち。

「密航ッ！」

二人はそう言った。

「ゴシゴシ……ゴシゴシ……

孤独になるハズの旅に汐華咲と柏木茜がプラスされた。

「何じやこりゃ ああああああああああああああッッッ！？」

バカが一匹、密室で絶叫した。

「ショック・ザ・神の僕！？」

続けて二匹目。

蒼神博士は再会してはいけない連中を引き連れ、自室に戻った。あのまま一人を世間様にさらしてはいけない……そんなオトナの真心から。で、入室するやいなや、冷蔵庫に頭を突っ込んでいるのが汐華咲（何故かスター姿）。身長は160センチ前後くらいで、非常に短く切りそろえた黒髪が特徴的。衣装のせいで体格はよく分からぬが、スリムっぽい。一方、寝室のマットレスを寝転んで吟味しているのが柏木茜（何故か神父姿）。背丈は咲より頭一つ分くらいう高く、栗色をしたミディアムの姫カット。衣装の上からもハツキリ分かる腹部ポツコリさん。体脂肪率は40%くらいありそう。

「…………で、どうして密航なんか？」

「ぬッ、神々しい生肉を発見！ ダイレクトにいつてくれるー」

「ふにゃー、たまんないー

人の話を聞け。そして、牛肉に塩をふるな。

「会社に報告しなかつたんですか？」

「しましたよ。きつちりと」

「じゃあ、どうして！？ 死人が出ているんですよーー」

「上回からは“だつたら死んでこい”って言われました

「……は？」

「つまり、死にに来ました」

開封済のワインボトルを握り締めながら、シスターが胸元で十字を切る始末だ。こうなつてしまつては、この二人同伴でP.F.R.S.本部へ潜入するしかないワケで……。

「いいでしょ！ こうなつてしまつた以上、今からボクはアナタ達の正式なクライアントです。よつて、ボクの言うことは絶対守つてもらいますッ！」

ゲフフ
ブツ

ゲップはするし屁はこくし、最低の返事が返つてくる。

「まず一つ！ ボクの指示なくして勝手な行動をとらない！」

ビシツと人差し指を突き出して一喝。

「一つ！ 御一人にはP.F.R.S.本部の手前で本土に帰つてもらいます！」

ビシツと一本目の指を立てる。

「神に誓つて！」

「右に同じ！」

うわあああ

……ロイツ等、約束破りたくてウズウズしてる。

(巻き込んだのはボクだ……責任は負う)

彼は人並みに保護者としての責任に似たモノを感じていた。

「そういえば、ギヤラの交渉が途中でしたね」

旅行カバンの中から財布が取り出された。ブ厚い。札を入れる部分がやたらブ厚くなつていて。援交っぽい画になつてなんかイヤラしい。

「スゴイよ咲ちゃん！ お財布がピッヂピチで苦しそうー。」

「おのれッ、この非国民めッ！」

床に正座して、天に両手を差し出しつつも文句をたれるシスター。

「ええと…… そういえば、幾らくらい払えばいいんでしたっけ？」

「スマセン、質問があります」

質問したら質問で返された。

「はい、何か？」

「大きな数字つてよく分からないんで、物に換算した場合…… 上力ルビ何人前食える？」

「執事喫茶何回通えますウ？」

そんな価値基準でいいのか？

「……では、依頼料の件は後日イレギュラーと交渉といふことで」

力チャカチャ、カタカタ……

蒼神博士はPCをテレビにつないだ。

「よく観ていってくださいね」

テレビモニターに映し出されたのは、海洋に浮かぶ正方形形状の巨大な環境都市。その中央には、黒光りする高層ビルがそびえ立っている。

「当時はまだ実験段階だった『マリンコロニー』のシステムを導入し、PFRSは4年かけて建造されました。資金の殆どを軍部がバツクアップしているため、全ての設備が軍仕様で、テロリストやハッカーへの対策は万全。海上・空域ともにレーダー探知されており、認証コードを持たない所属不明の機体が接近すれば、即座に軍へ通報されます」

「あたしの知り合いに、『夜のレーダー技師』って呼ばれているヤツがいます

そりゃ ただのストーカーです。

「かと言つて、海中は広域海底火山の影響で巨大な岩が出つ張り、潜水艦による接近も難しい」

「わたしの知り合いに、『夜のソナー技師』って呼ばれているヤツ

がいます

そりやただの盗聴マニアです。

「そこでボクの立案した作戦ですが、PFRS本部から最も近い港には、メンテナンス用の海底トンネルが本部の発電施設までつながっています。そこを歩いて行きます」

「はいはーい、警備とかは?」

「問題ありません。海底トンネルの存在は、政府が契約する特定の業者と、一部の上級職員しか知りません。ただし、ボクのエロはどうせ使えないんですけど」

「つまり、あたし等は海底トンネルの出口まで付き合えばいいって」「ト?」

「でもオーー、IDが無効つことは入り口で立ちんぼ?」

「大丈夫です。政府指定の業者の一人が、ボクの話を聞いて協力してくれることになります。港で落ち合つ予定です」

彼の心中で、まだ弱々しかった決意がギュッと引き締まった。

「で、具体的にPFRSとやらで何が起きてるんですウ?」

神父もワインのボトルを発掘し、それはもう手慣れた感じでグビグビグビッ。

「このバカ!..」

ばしつ

「あうツ!」

シスターが神父をぶつ。そして、小芝居。

「飲酒はハタチを過ぎてからって、いつも言つてるでしょ!..」

「『ごめんなさい……わたしが間違つてた!』久しづりの合法的な食事につかれてた!」

ヒシッ

抱き合つ醉つ払い共。シスター、オマエも未成年だぞ。

「PFRS本部ビルのP4施設で、バイオハザードの一種が発生しています。職員十数名が、正体不明の『何か』に感染しました。本部はその事實を隠蔽しているのです」

蒼神博士は面前の小芝居をバツサリと無視し、話を進める。

「それ以外にも、国外から不法滞在者やホームレスを拉致し、違法な人体実験を行っています。私も立ち会ったことがあります……遺体は溶解処理され海に流される。被験者の個人情報は、この世から全て消されます」

「ほう、そりゃけしからんな」

腰に両手をあてて窓から大海原を眺めるシスター。その背中は堂々としている。酔っ払ってるけど。

「バイオハザードの原因は、『神の設計図^{バイタルズ}』にあると推測しています」

モニターに映される怪物体。

「ばいたるず？ 若手か？」

芸人ではありますん。

「『神の設計図^{バイタルズ}』とは……20年前、現在のPFRS本部が位置する海域にて、地殻変動により海底から吐き出された正体不明の遺物です。人間の造形と酷似していて、半透明の全身には人体を構築する組織全てが正しい位置に在り、電子顕微鏡を使用してはじめて確認できる、微細な箇所まで正確に造られています。つまり、『人類の完璧な標本』いえ、コレを最初に精密検査した科学者は、

“人類を創り出すための完璧な設計図”と考えました

モニターに映った怪物体をジッと見つめる咲と茜。そして、感想。

「男？ 女？」

「大人？ 子供？」

特にどうでもいい様子。

「先日も申し上げましたが、ボクはヒットマンの襲撃を受けました

……この船も100%安全というワケではありません

「はッはッはッ！ そのためのあたし等です！」

「博士の盾となり武器となり、情婦となりますウ

結構です。

優雅な船旅と喧騒の予兆

「で、博士は自分の元職場をどうしたいわけ？」

シスターは相変わらず腰に両手をあてて、大海原に視線をやつていて、何だか背中が大きい。

「間違いを正したいんです」

彼は実に分かりやすく断言した。

「何で？」

「……え？」

予想外の切り返しに博士が唖然とする。

「PFRSは国が管理する正当な研究機関なんです！ それを一部の職員が私物化して、違法な実験を行うなど以外です！」

博士は身振り手振りもまじえて熱く語る。

「要するに“白”という正義があつて、“黒”という正義とぶつかつてる。お互いが正しいと言つて譲らないわけだ」

「PFRSの非道に『正義』なんかありません！」

「使われない核兵器に悪意は無し。例え使つたとしても、爆発の瞬間や死体の山を撮つた映像を確認しない限り、人は『悪』を定義しない」

「閉鎖的空間の中で行われた暴挙は、公に認識されなければ『悪』ではないと！？ 那は違う！ 悪意は確かにソコに存在しています！」

咲の物言いに対し、蒼神博士はつい向きになつて声を荒げた。

「まあまあ、落ち着いてくださいなア 咲チャンちょっとびり酔っちゃつてるんで」

「そのと一いつじやー！ 優美として除湿剤に溜まつた聖水を頭からかけてやるつづー！」

「やめてエエエエー！ 楽しいけどやめてエエエエー！」

バタバタバタ……

(ボクは何に負けたんだろう?)

命を狙われた。政府機関を敵に回した。さあ、示そう。自分こそ
真の『白』であると。

「博士 ッ!」

「えッ? あ、はい……」

いつの間にか金属バットを片手に構えたシスターが、元気良くて
ライアントを呼びつける。彼女の足元には神父が倒れてたりするし。
頭部から流血してたりするし。

「あたしもう飽きたッ!」

そう言つてバットをブンブン振り回す。

「……あ、あの～～、ここから更に重要な説明を……」

「主は申されましたッ! エロゲーにオチはいらんとッ!」

ドコの主だ。

「要約するとですね、わたし達ボディガードは右脳も左脳も使わな
いから別にイイじゃん……ってトコロですウ

血みどろの神父が笑顔で言及。コイツ等、やっぱダメだ。

「……それじゃ、メインテッキのプールで遊んでてください
彼は週末のお父さんみたいな声をもらした。

「そいつは無理だ! 水着が無い! 以上ッ!」

バタンッ!

そう言い残してシスター、退室。

「わたしは一応、水着持つてますけど……でも、きやは」

バタンッ!

謎のリアクションで神父も退室。

「あの……ボディガードは?」

一人とり残される始末。博士は仕方ないんで、ギャラリー抜きの
説明を続ける。

<午前・10時24分> モニターに映るのは監視カメラの映

像。巨大な水槽の中に佇む神の設計図^{バイタルズ}。その前に立ち尽くす蒼神博士の姿。

（有機物の塊…………しかし、動力源は？　脳の一部で何だかの電気信号を確認したが……）

口元に手をあてて、モニターの前で考え込む博士。そして

「ジカン・ヲ・ムダ・ニスルナ。ハヤク・ミツケ・ロ」

しゃべった。バイタルズ人体模型が口も動かさず言葉を発した。

（「見つける」？　一体、何のことだ……？）

カコツ

キーを打つてファイルを閉じた。とにかく情報が足りない。いざれにせよ、本部への潜入なしには回答は得られない。彼は深く息を吸つて目を閉じた。

で、その日の夕方から夜にかけて

廊下で金属バットを振り回し、子供達を追い回すシスターを見かけたり。神父がバスルームから卑猥な声を発してたり。メインデッキで牛丼を立ち食いしているシスターを見かけたり。神父がキッチンで焚き火をはじめて警報が鳴り出したり。船尾でゲロ吐いてるシスターを見かけたり。神父が酔った勢いで首吊り自殺をはかつたり……蒼神博士の孤独なようでやかましい船旅の1日目が終わろうとしていた。

「あ、あの……茜さん……」

「なんざましょ？」

「クライアントの立場から言わせてもらいますが、ソコはボクのベッドです」

夜も更け、乗客の皆様が就寝しだす頃となり、博士はビシッと文句をつける。

「はいはいそーですとも。さあ、ビーぞ」

茜はベッドの上に寝そべって博士を誘う。

「いや、そうじゃなくて……どいてください」

「ひどいッ！ 体脂肪率の高い女の子をベッドから引きずり出して、
寒空に放り出すおつもりッ！？」

真夏です。

「ソファじゃ駄目ですか？」

「ダメ。わたしの様な乙女は、高級マットレスを使ったベッドで寝
ないと爆死します」

そんな乙女はいません。

「と、とにかく……色々とマズイですからどうしてください…」

蒼神槐・23歳、赤面。

「い、や、だ、よ、～～～

「……よく分かりました。ボクがソファで寝ます」

クライアントが寝室から追い出された。スコス音と撤退する博士
の後ろで、快適さにのたうちまわる茜。

(……ん？)

彼は妙な光景を目にした。リビングの片隅で壁を背にして膝を折
り、背中を丸めて座り込んでいるシスターが。

「何をされてるんですか？」

「あたしも寝る

「そんなトコですか？」

茜とは違い、まだコスプレもしたまんまだ。

「博士H～～、咲チヤンの」とは気にならないでH～～

マヌケな声がそう告げる。

「そうやつ、気にしない。ひとつと体を休めてうつよーだい。あたし
やもう眠り……

カクツ

首がうな垂れ、すぐに微かな寝息が聞こえだした。寝つきが良い
といつより、まるで即死だ。

ピッ

照明を落とす。部屋中に淡い闇が広がる。カーテンの隙間から月光が僅かにもれる。

（疲れた……本当に疲れた……）

蒼神博士はソファの膨らみにその身を沈め、目を閉じた。客船に乗つて予定外の心配事が増えてしまつたためか、心労で意識が溶けるのに時間はいらなかつた。豪華客船のあらゆる箇所から、灯火が消えていく。とても静かに消えていく。船底にぶつかる細波から、海中の生物達の寝息まで聞こえてきそうな夜。

潮風が……止む。

「すううう……すううう……」

10分も経たない内に、客室は三人の寝息ですっかり満たされた。いた。殆どの客室で、成金共が心地良い夢の中にトリップしはじめた頃……

ヒュンヒュンヒュンヒュン

夜の帳が震えだした。金属の羽が大気と薄雲を裂く。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

へりだ。民間用でも報道用でもない。かといって、攻撃的な装備も見受けられない。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

とても静かに飛んでいる。チューングアップされた無音へりだ。へりはゆっくりと高度を下げはじめ、客船の真上に位置をとる。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

メインデッキのプールの水面に小さな波を作りながら、ヘリポートへ着陸した。そして、降り立つ者。数は四人。出迎える者などダレもない。ダレもこの来訪者達に気付いていない。乗客然り、船員然りだ。四人は一言も発さず、辺りを見回している。全くもって

静かだ。人も海も月も、善意も悪意も、等しく墮ちて。

蒼神博士はクツシヨンをしつかり抱いて。

茜は満足感あふれる笑みをこぼして。

咲は

「……さて」

動。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973z/>

考え方よ。

2011年12月16日17時54分発行